
アイスクリームの煮物

あきら るりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイスクリームの煮物

【Nコード】

N8210Y

【作者名】

あきら るりの

【あらすじ】

「アイスクリームの煮物」というお題を戴いて書いたものです。

……玄関を開けてまず目に入っただのは混沌の海だった。
いやそれは大げさだけど、1Kのアパートの台所に焦げ付いた鍋
や放りっぱなしのボウル、卵の殻や正しく調理されなかった食材の
残骸が山積になっていれば誰でもまず絶句すると思う。

腐れ縁の悪友から電話がかかってきたのは午前10時。普通なら
問題ない時間ではあるんだけど、

「……あんた、あたしに恨みでもあるのか」

看護士を職業とし、夜勤明けで寝付いたばかりのあたしは、名乗
った『奴』に地の底から響くような声で第一声を返した。

電話の向こうの『奴』は慌てふためいて謝り倒し、続けて夜勤明
けと知っていて叩き起こした理由を力いっぱい説明し、最後には泣
きそうな声でSOSを訴えてきたもんだから、徐々に目が覚めてき
たあたしは最終的にほだされて約1時間後に『奴』のアパートに行
くと約束して電話を切ったのだ。

ある程度の惨状は想像していたとはいえ、ここまでくると『よく
もまあ』という感じた。

「……で？ あたしは何をすればいいの、プリンを作ればいい訳？」

「いや、作るのは俺じゃなきゃいけないんだ、お前は後ろで技術指
導をだな」

すごくほつとした顔であたしを出迎えた『奴』は、とても嬉しそ
うに話し掛けてくる。

「……ほお、『技術指導』をとな。あたしは高いぞ」

「いや、もう助けてくれるんなら」

「思いつきりしごくぞ」

「……覚悟の上で」

「睡眠時間を削ってるんだからな、『割増手当て』付きで」

「わかりました、『先生』」

緩んだ顔が段々固まってきたような。あたしは『奴』のそんな反応を楽しんでから、号令をかけた。

「じゃ、まず最初に。その台所を片付けるように」

「……モノが完成してからじゃダメ？」

恐る恐るお伺いをたててくる『奴』に、あたしはにっこり笑って、
「ダ・メ」

と首を横に振る。そして、大きく息を吸って。

「お菓子作りをなめるな、材料の計量は正確に、手順は端折らず順番通り・時間通り、それなくして勝利はありえん　！！」

「はい　！！」

『奴』はびしつと直立不動であたしに敬礼のカタチをとり、慌てて台所を片付け始めた。ノリのいい奴。そういえばこいつは体育会系だった。

あたしは部屋の奥に上がり込み、お膳の上においてある緑茶のティーバッグを空いてるマグカップにいれ、湯沸しポットのお湯を注ぐ。そして、てきぱきと動く『奴』を見て　大きく溜息をついた。

『奴』があたしの同級生でもある同僚の看護士の女の子と付き合いはじめたのは今年の春。

あたしは病院内でのごくごく身内の飲み会の席で『奴』に彼女を紹介するように頼まれ、橋渡しをした。ちよつとこつい感じの『奴』と見た目儚げだけでも実はしっかり者の彼女との組合せはどうかなのと思っただけでもそんな心配は無用だったようで、二人はつつがなくお付き合いを続けている。

この間、彼女は風邪をこじらせ数日前から休みをとっており

案の定『奴』は仕事中はごまかしているものの、患者に見えない奥の部屋ではやたらそわそわして　　昨日の夕方、入れ替わりに病院に入ったあたしに

「今からちよつと見舞いいつてくるわ」

と挨拶して帰っていったのだ。

その彼女の肝心の病状だが……高熱を出し、なかなかそれが下がらないようだった。

「それでよ、あいつが……『パパの作ったプリンが食べたい』とかうわごとみたいに言っただんだ」

さっきの電話で『奴』が涙を誘われたように大げさに語った。

彼女の家の境遇については、あたしも片鱗ながら聞いている。確かお父さんが早くに亡くなって、お母さんが一人で育ててくれた、とか言っていた。

「頼むよ、俺にプリンの作り方を教えてくれえ」

……まるでどこかのラブコメの漫画のような展開。そんなことを思いながら2人の仲人のような立場であるあたしは、つつい『教えてやる』と返事をしてしまったのだった。

30分後。ほぼ綺麗になった台所をみてあたしは指揮官よろしく頷き、次の号令を下した。

「はい、じゃ、ここに材料を並べて」

やつがいそいそと食材を並べ始める。牛乳、卵、砂糖。

「そしたらまず計量」

そういった途端、奴は頭を捻ってあたしに訊ねた。

「なあ、牛乳500mlってどうやって計ったらいいんだろ」

「……さっきはどうしたのよ」

「コップ1杯で約200mlって聞いたことがあった気がしたから、これで」

と硝子のコップを差し出す『奴』。

あたしはつい脱力した。とはいえ、普通男の一人暮らしで計量カップを置いてある家はないだろうな。

溜息をついて、鞆を漁る。『こんなこともあるつかと』という奴だ。

「使え」

取り出して渡すと、『奴』は恭しくそれを受け取った。

「おお、これが『伝説の計量カップ』！」

「何だその『伝説の』って」

軽口を叩きながら、材料を計り、鍋に全部それを入れようとする。

「いきなり全部混ぜるな〜！！」

びくつとする『奴』の背中。

「卵は室温でしばらく放置！先にこれを牛乳に溶かして！

」

あたしは鞆からバニラシュガーを取り出し、『奴』に渡す。

「へえ、いい匂いがするなあ」

『奴』が感心しながら牛乳にバニラシュガーを注ぎ入れ、混ぜる。

「牛乳を火にかけて。沸騰させちゃだめだかね」

「はいはい」

と最初は余裕を見せていたものの、

「次、卵と砂糖。泡立てちゃだめだから」

「牛乳と卵を合わせる。一気に合わせちゃだめよ、少し入れて混ぜ

て、を繰り返して」

「あくでてない？出てたら漉して」

「冷えすぎないうちに容器に入れて」

と矢継ぎ早に指示を出すうちに、『奴』の背中がだんだんあせって

くるのが分かる。

「蒸すわよ。レンジじゃ煮えちゃうじゃない。……じゃ、その鍋蒸

し器に使う」

最後はあたしがしゃしゃり出て、そこにあるもので簡易蒸し器を

つくって火にかけた。

「……あとは？」

「蒸しあがるのを待つ。そうね……30分から40分はかかるわね」

そついうと、『奴』はお膳のあたしの正面の位置に座り……いき

なり床にぐたつと延びた。

「……」

「疲れた？」

「俺はお菓子作りをなめていた……」

「まあ少し休みなさい」

「ん……」

『奴』はしばらく天井を見ながら深呼吸をしていたが、やがて首だけあたしのほうに向けて訊く。

「しかしお前がこんなにお菓子作り詳しいって意外だったなあ」

「……昔、ちよつと凝つてたことがあるからね」

むかあしむかし。好きな男の子のために、一生懸命勉強した。その恋は伝えることすら出来ず、お菓子を作つてあげることなどとうに叶わずに終わったけれど。

「そつかあ。ここまで当てにしていた訳じゃなかったけど、助かったよ」

「礼はちゃんと出来上がつてからにきなさいな」

そういうと、『奴』ははは、と笑う。

「お前、本当にいい奴だなあ」

それはこつちの台詞だ。風邪引いた彼女の為の我儘につきあつて、こんなにわたわたしながらプリン作つてやろつてんだから。

……昔のラブコメの漫画なら、ここで砂糖と塩をすり返るくらいのことをするんだろうけど、あたしは幸いなことにそこまで性格は悪くない。

「あ、そうだ、冷蔵庫に俺の失敗作あるんだけどさ」

「捨ててなかったの」

「冷やしたら固まるのかなあつて、冷蔵庫の中入れっぱなしだったんだ」

『奴』はよつこらせ、と起き上がつて冷蔵庫から『失敗作』を持つてくる。

クリーム色の液体。あたしはそれを見て……持ち上げて、揺らし

て 何だ、固まってるじゃないじゃん 口をつける。

「アイスクリームの煮物？」

何だそれえ、と言つて『奴』が笑つた。

次の日。

「よ」

後ろから肩を叩かれ、あたしは振り返る。

「昨日はありがとな。すつげえ喜んでくれた」

「良かったわね」

「今度、メシでも奢つたる。何でも言え」

「グリル のコースがいいなあ」

そう応えると、『奴』の顔が笑顔のまま固まつた。

「……ぼつたくつてねえか？」

「最初から『高い』つて言つた。『割増手当ても込みで』つて」

ひえー、といいつつ、『奴』の顔はまんざらでもない。うん、好きな娘の笑顔を見られたら嬉しくつてしょうがないよね。

「明日は多分復帰できるつて言つてたぞ」

「よかった、助かる」

「じゃ俺、いくわ。……あれだけうまいお菓子が作れたら、お前に惚れられた男はきつとお得だな」

「有難う」

廊下を歩く背中を見ながら。

……それを惚れた男に披露する機会は、こんなカタチにしかならなかつたんだけど、ね。

けれど……『奴』が笑つてるから、まあいいや。

そして、あたしは『戦友』から自分の役職に戻つて、反対の方向を向いて歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210y/>

アイスクリームの煮物

2011年11月24日14時49分発行